

## 宮古の島々の方言呼称、および季節を表す方言

本 永 清（前宮古島市史編さん委員）

2017年10月29日、宮古教育事務所の大ホールで「平成29年度すまふつ普及人材養成講座—自分のすまふつ事典を作ろう—」（主催：沖縄県・沖縄県文化協会、主管：宮古島市文化協会）の第4回講座が開催されました。その時、私は力不足ながらも講師を務めさせていただきました。本稿は、当日会場で講演資料として参加者に配布したのですが、本誌掲載に当たり、一部の表現を訂正の上、いくらか加筆もしてあります。

### はじめに

本講座は、宮古方言を記録する事業の一環として、企画されたものだと伺っています。私の記憶では、宮古島市文化協会のような半ば公的団体によって、こうした取り組みがなされるのは、宮古ではおそらく初めてのことだろうと思います。今後、この企画が多くの市民のご理解とご協力を得て、事業として大きく発展し、いずれ立派な方言集なり辞書なりができることを期待しています。

申すまでもなく、言葉はコミュニケーションの手段です。私たちは、言葉を通して、自分の意思を相手に伝え、また相手の意思を理解することができます。コミュニケーションの手段にはいろいろありますが、おそらく言葉に勝るものは何一つないでしょう。それだけ言葉は、コミュニケーションの手段として重要です。

しかし、言葉はコミュニケーションの手段だけではありません。私たちは、言葉によって、感情を育み、思考し、人間性を形成していきます。言葉がなければ、異性を好きになる感情など一体どうなるのか、これは心配です。言葉のない世界にはもちろん、文学も哲学も生まれないでしょう。人が人として生きる上で不可欠なもの、それが言葉だと言えないでしょうか。

方言に話を戻しましょう。私は宮古城辺の西東で生まれ、高校卒業まで宮古で過ごしましたので、宮古方言（正確には西東方言）を自由に使いこなすことができます。大学卒業後も、宮古での教員生活が長いものですから、親戚や隣人たちの間に入ると自然と方言が出てきますし、その場合は方言で思考しています。

昨年の今頃だったかと思いますが、宮古に帰省した際に、タクシーの中で運転手さんとこ

んな会話を交わしました。その日は、空港から外へ出ると小雨でした。

「アミヤー、ズーッティヌ、フリーナー？」 (amja: dzi:tti-nu furju:-na: 雨はずっと降っているの?)

「アリ、ウヌ、アミヤー、ストウムティカラドゥ、ビビーティ、フリードー」 (ari unu amja: sītumuti-kara-du bibi:-ti: furju:-do: それよ、この雨、朝から ビビーと、降っているんだ)

この時、私はハッとしました。運転手さんが何気なく、それこそ自然に使ったビビーという擬態語、宮古生まれの私にはもちろん、他人から特に説明を受けなくても、そのニュアンスを即座に理解できます。雨の状況を肌で感ずることもできます。しかし、もしこの言葉を共通語に言い直すとしたら、……そんなことを考えたのですが、適訳が見つかりません。苦しまぎれに「(小雨が) 細い糸のように降り続く状態」と訳してみたのですが、そうするとその瞬間ですが、肝心の小雨から受ける肌感覚みたいなものはどこかへ消えてしまって、私の頭の中では糸車がしばらく、カラカラと音を立てて回っているだけでした。

方言にはその表現の妙がある、そのことに気づきました。そして、方言で現実を認識できる喜びを感じました。このことはもちろん、共通語を下に置くわけではありません。共通語にはその表現の妙がありますし、共通語で現実を認識できる喜びにも、また格別のものがあります。しかし、共通語と方言とでは、その認識の仕方が、つまり現実の切り取り方が、それぞれ微妙に違うと言えないでしょうか。少し大げさな言い方をすれば、方言はそれを使う人々に、共通語で表現できない別の世界を開示して見せる、今はそんな感想を抱きます。

ところで私は先程、認識という言葉を使いました。多くの識者が「民族が言語を失うとその民族性を失うことになる」と指摘しています。一般的に言えば、民族はその言語によって、自らの存在を認識するとともに、固有の文化や価値観を創造し、社会を形成していきます。そして、今と明日をできるだけ豊かに生きようと努力します。言語を失うと民族としての自己認識の手段を失うこととなります。そうすると長い間積み上げてきた固有の文化や価値観が消えて、日常生活の変質はもちろん、結局はその社会が維持できなくなります。これを方言に当てはめて考えると、同じことが言えないでしょうか。私たちがなぜ、宮古方言を保護し、継承する必要があるのか、それは私が今、一般的に述べたことから推察できるかと思えます。

さて本日、事務局から私に与えられたテーマは2つあります。1つは宮古の島々の、方言での呼称について、もう1つは宮古の季節を表す方言について、それぞれ事例を上げて説明することにあります。ただし、両テーマに特別の関連性があるわけではありません。前者は空間、後者は時間を表す言葉です。話のテーマとしては、それぞれ別の次元になります。し

かし、方言の記録事業ということになれば、できるだけ多くの語彙を蒐集することが目的ですから、こうしたテーマの設定の仕方にも、一定の合理性があるなあと納得しました。

なお、私は宮古方言を専門的に調査・研究しているわけではありません。大学時代に国語学を少しばかりかじったので、今でも宮古方言にいくらか関心を持って、機会があればその特徴や魅力について素人なりに発言しているだけです。今日のお話では、どこまで事務局の意向や聴衆の皆さんの期待に応えることができるのか、それは覚束ないですが、私が本日のテーマに関して所持している宮古方言のデータを提示して、皆さんと情報や意見の交換ができれば本望だなあ、と考えています。

## I. 宮古の島々を、宮古各地の方言ではどう呼ぶのか。

宮古には、宮古島、大神島、池間島、伊良部島、下地島、来間島、多良間島、水納島の8つの島々があります。そのうち、下地島には集落がなく、島の方言呼称も特にないようですから、ここでは同島を考察の対象から省きます。

大神島の北よりの海上に浮かぶフディ岩も近年、島として登録されました。これも合わせると、宮古の島々は9つということになります。ただし、このフディ岩についても、考察の対象から省きます。私はフディ岩について、ほとんど情報を持ち合わせていないからです。

さて、私は先ほど城辺の西東で生まれたと述べましたが、私が話す西東方言では、宮古島をミャーク (mja:ku)、大神島をウガム (ugam)、池間島をイクヤマ (ikjama)、伊良部島をイラヴ (irav)、来間島をフファマ (ffjama)、多良間島をタラマ (tarama)、水納島をミンナ (minna) と呼びます。

皆さんの島や村の方言では、宮古の7つの島々をどう呼ぶのでしょうか。ちょっと気になって、調べた結果を一覧表にして見ました。(表1)

説明を加えましょう。宮古島は、大神島でメーク (me:ku)、多良間島と水納島でメーク (me:ku) と呼びますが、それ以外の島や集落では共通してミャークです。こうした呼称の違いは、言語学でいう音韻変化によるものです。

宮古島を指して、かつて大神島ではウプスマ (upu-sima)、伊良部島の佐和田ではウクズマ (uxu-dzima)、同佐良浜ではウフズマ (uhu-dzima) と呼んだようです。小さな離島から見て、大きな島という意味です。ミャークの語義については、あとで見ることにします。

大神島については、同島でウカム (ukam)、市街地の西里などでウガム、狩俣などでウガン (ugam) です。これも音韻変化によるものです。語義は、漢字表記の「大神」ではなく、お

表 1 : 宮古の島々を、宮古各地の方言でどう呼ぶのか。

	宮古島	大神島	池間島	伊良部島	来間島	多良間島	水納島
西里方言	mja:ku	ugam	ikima	irav	ffjama	tarama	minna
狩俣方言	mja:ku	ugan	ikima	irav	ffjama	tarama	minna
島尻方言	mja:ku	ugan	ixama	irav	ffima	tarama	minna
久貝方言	mja:ku	ugam	ikjama	irav	ffjama	tarama	minna
福北方言	mja:ku	ugam	ikjama	irav	ffima	tarama	minna
西東方言	mja:ku	ugam	ikjama	irav	ffjama	tarama	minna
友利方言	mja:ku	ugam	ikjama	irav	ffima	tarama	minna
砂川方言	mja:ku	ugam	ikjama	irav	ffima	tarama	minna
宮国方言	mja:ku	ugam	ikjama	irav	ffjama	tarama	minna
与那覇方言	mja:ku	—	ikima	irav	ffima	tarama	—
大神島方言	me:ku	ukam	itfima	irav	ffema	tarama	minna
池間島方言	mja:ku	ugan	ikima	irav	ffima	tarama	minna
佐和田方言	mja:ku	ugam	ikjama	irav	ffema	tarama	minna
国仲方言	mja:ku	ugam	ikima	irav	ffima	tarama	minna
伊良部方言	mja:ku	—	ikima	upu-irav	furima	tarama	minna
来間方言	mja:ku	ugam	ikima	irav	ffima	tarama	minna
多良間方言	me:ku	—	ikima	irav	ffema	tarama	minna
水納方言	me:ku	—	—	—	—	tarama	minna
自由欄							

そらく「拝む」でしょう。このことについては、すでに多くの方々が指摘しています。日本の各地には、特定の離島を信仰の対象として見る地域もあったようです。あるいは、大神島もかつて宮古の他の島々から、そのように見られていたかも知れません。

池間島については、市街地の西里などでイキマ (ikima)、島尻でイカマ (ixama)、大神島でイチマ (itfima)、久貝などでイキヤマです。池間の語源は明らかではありません。

伊良部島の呼名はどうでしょうか。宮古全域で、共通してイラヴ (irav) ですが、語源は不明です。伊良部島は、奄美諸島の沖永良部島とよく比定されますが、その関係も定かではありません。

来間島については、市街地の西里などでフファマ、島尻などでフフィマ (ffima)、大神島などでフフェマ (ffema)、伊良部でフリマ (furima) です。語源は「南の島」から来たのでしょうか。宮古方言では南をパイ (pai) とか、ハイ (hai) とか言いますが、これは古語の南風とつながります。音声的には f、p、h は相互に近い音ですから、どこかで音韻変化を起こして、その過程で f の音だけが残ったのかも知れません。しかし、証拠とするのはただそれだけで、他に確証はありません。

多良間島はタラマ (tarama)、水納島はミンナ (minna) です。宮古全域でこの呼称は共通しています。どちらも漢字表記の読みと同じで、語源は不明です。

いかがでしょうか。宮古の7つの島々を各地の方言でどう呼ぶのか、ほんの遊び心からその一覧表を作ってみたわけですが、こうして眺めてみると島々の方言呼称も、その呼ぶ地域によっていろいろであることに気づきます。この多様性に気づくこと、これが方言を記録する作業の第一歩になります。

## II. ミャークは多義語である。

ここでは宮古、つまりミャークの語義について説明します。

皆さんは、友人や職場の仲間同士で宮古の話をする時、まず空間的に抱くイメージはどういうものでしょうか。私の場合、それは会話の場面にもよりますが、狭くは自分の生まれ育った村や、時々遊びに出かけた隣の村であり、広くは地図上の宮古島であったり、あるいはその範囲を広げて、多良間島や水納島を含めた宮古諸島であったりします。これは私が日常的に抱く宮古のイメージです。

ところが宮古、つまりミャークは多義語であることが、方言調査や民俗調査をする中で判ってきました。私たちは日常あまり気づかないけれども、ミャークは空間的概念だけでなく、時間的概念や、社会的概念を表す言葉でもあったのです。以下、事例を上げてそのことを説明しましょう。

### 1. ミャークは、まず地理上の概念「宮古」を指す。

ミャークは、申すまでもなく、一般的には地理上の概念「宮古」を指します。それは次の用例で理解できます。

- (1) ba-ga mmari-dzima: mja:ku. 私の生まれ島は、宮古だ。
- (2) mja:ku-nu pïto: kïmu dzo:-munu. 宮古の人は心がきれいだこと。

- (3) mja:ko: kadzi-nu fuki sīma. 宮古は台風の吹く(多い)島だ。  
 (4) dzu: mja:ku-ŋkai asipī-ga! さあ、宮古に遊びに(行こう)！  
 (5) kunu mango:-ja mja:ku-kara. このマンゴーは宮古から(送ってきた)。

(発音は西東方言)

こうした用例は、宮古方言が達者であれば、おそらく幾らでも引き出すことができるでしょう。歩きながらでもやれば、楽しく、思考の訓練にもなります。私自身について言えば、時にはそうした「方言散歩」をして、宮古に住む友人・知人たちを懐かしく思い浮かべながら、郷愁を満たしています。

## 2. ミャークは、人の居住地「集落」を指す。

このことは、おそらく始めて聞く方もいらっしゃるでしょう。私も最初はそうで、これには驚きました。しかし、宮古で比較的古い集落の狩俣に住む人たちは、現在でもその意味を保持しています。

狩俣では、現集落とその周辺の地域を3つに分けて、それぞれに宗教的意味づけをしています。例えば、人の居住地、つまり集落がミャークです。そして、集落の西側に広がる聖林一帯、そこがニスマ(ni-sīma 根島)で、祖先神たちの住む空間とされます。南の海辺の一角には墓地地帯がありますが、そこはパイヌスマ(pai-nu-sīma 南の島)で、死霊のたむろする空間とされます。この3つの象徴的空間を意識して、狩俣ではかつて、その数々の年間祭祀がとり行われていました。今は神女たちの選出が出来なくて、多くの年間祭祀が中断されたままのようですが、それはともかく、狩俣でこうして村人の居住地を他の空間と区別し、特にミャークと呼んでいることは注目してよいでしょう。

【コーヒー・タイム】16世紀から17世紀にかけて首里王府により編纂された歌謡集『おもろさうし』には、集落を表す言葉に「まきよ」が出てきます。ミャークは、これと同根の言葉でしょう。

## 3. ミャークは、宗教的概念「この世、現世」を指す。

池間島では、この宇宙空間をティン(tin 天)、ミャーク(mja:ku 宮古)、ニイア(niīza 不明)の3界に区分します。ティンは天上界で、神々の鎮まる世界。ミャークは人間界で、この世、現世。ニイアは地下界で、死霊のたむろする世界。……これが池間の人たちの抱くコスモロジー(宗教的宇宙観)です。私はかつて、池間島へ民俗調査に入った時、あるリーダー格の神女から池間島のコスモロジーを聞かされました。……さて池間の人たちは、こうしたコスモロジーに基づいて、自己を含めた客観的存在、つまりこの世界を体系的に認識し、

解釈しているように見えます。それは池間の人たちの年間祭祀を見れば、容易に理解できることです。なお、3界に分類された宇宙体系の中では、真ん中に位置するミャークがもちろん、宇宙の中心に当たります。

ミャークをこの世、現世と見る世界観は、宮古の歌謡の中にも現れます。一例を上げましょう。宮古でトーガニ (to:gani) と呼ばれる歌謡のジャンルに入るものです。

matsigi-ga pa:-ja 松木の葉は

sa: jo:i: サー ヨーイー

matsigi-ga pa:-ja ma:n 松木の 葉は マーン

sumdza-nu munu-jo: うらやましい ことヨー

kari: utii-kja:-mai 枯れて 落ちるまで

mavkja:-du:ri-jo:i: 向き合った まま ヨーイー

ban-ta-ju-mai ma:n 私たちも マーン

mja:ku-tu na:gi この 世が ある 限り

mavkja:-du su:-di-jo: 向き合うことに するよヨー

(『城辺町史第六巻歌謡編』より)

ここで松木というのは、琉球松のことです。琉球松は、二葉松類に属し、その向き合う二葉は、夫婦和合、異性間の愛、友情の絆などのシンボルとされます。

歌はその場面によって意味が規定されますが、ここでは婚礼の場を想定しましょう。するとこの歌は、「枯れて落ちるまで向き合う松の二葉。その松葉のように、私たち夫婦はこの世（現世）を生きる限り、いつも向き合って睦まじく暮らしていこうよ」と夫婦の強い絆、和合を祈る内容となります。「この世、現世」の意で、ミャークが用いられる一例です。もちろん、ここでミャークを「人の一生、寿命」の意に解釈することも可能でしょう。そこで次へ進みます。

4. ミャークは、「人の一生、寿命」などを指す。

私たちは、日常生活の中で、時には自分の人生に思いをめぐらせて、長生きしたいと考えることがあります。ミャークは、じつは今もちょっと触れたように、「人の一生、寿命」を表す言葉でもあります。同じトーガニのジャンルの中から、歌謡を一つ紹介しましょう。

kunu sakatsiki-nna この 盃には

sa: jo:i: サー ヨーイー

kunu sakatsiki-nna-jo: この 盃にはヨー

namdza-nu pana-nu-du-jo: 白銀の 花がヨー

kugani-nu pana-nu-du 黄金の 花が

ukjagari urja:jo: jo:i 浮かんで いるので ヨーイー

ɲkjagjura-mati-ju: お召しに なってユー

mja:ku-ja mtsinaka 人生を 2倍に 伸ばして

mavvari-samatfi:-jo: 長生き なされヨー

(『城辺町史第六巻歌謡編』より)

これは内容的には「勸酒と長寿祈願」の歌です。ここでは、例えば還暦の祝席を想定しましょう。すると「盃に満たした酒、それには白銀の花、黄金の花が浮かんでいます。どうぞ、お召しになって、人生を道半ばにして、つまり人生を2倍に伸ばして、長生きして下さい」となります。お祝いの席で、いわゆる主役を寿ぐ歌です。歌中のミャークは「人の一生、寿命」を意味します。

5. ミャークは、この世の「楽園」を指す。

宮古の各地に、クイチャー (kuitja: 声合わせ) という集団舞踊があります。ある村のクイチャーに伴う歌謡の中に、「アンチューキヤーヌ、ミャーク (antfu:-kja:-nu mja:ku)」という囃子詞を聞くことがあります。「みんなで踊り明かしている間が、この世は楽園だ！」という意味です。ここではミャーク、すなわち楽園です。

宮古方言には、ミャーク・ユー (mja:ku-ju: 宮古世) という言葉もあります。「太平で幸せな世の中、つまり楽園」の意に解釈して良いでしょう。

【コーヒー・タイム】多良間島には、タラマ・ユー (tarama-ju: 多良間世) という言葉があります。この言葉もミャーク・ユーと同じ発想で、「楽園」の意に用いられます。

### Ⅲ. 季節を表す方言

ここでは話題を変えて、季節を表す方言について、説明させていただきます。ただ、宮古ではかつて、1年を4季ではなく、2季に分けていたという情報があります。暦上の24節気



についても、ほんの少しだが触れることにします。

1. 宮古ではかつて、1年をナツ (natsi 夏) とフユ (fuyu 冬) の2季に分けていた。

私たちは普段、1年を春、夏、秋、冬の4季に分けて考えます。これは、私たちが学校教育を受けて、新しい知識を得たからでしょう。あるいはマスコミなどの影響もあるかも知れません。

しかし、宮古ではかつて、1年を4季ではなく、ナツとフユの2季に分けていたと言います。そのことを私は若い頃、民俗調査の中で古老たちから聞かされました。あとで気づいたことですが、宮古の歌謡トーガニの中にその痕跡を見ることができます。

natsi fuyu ka:ran 夏 冬 変わらぬ

natsi fuyu ka:ran 夏 冬 (その位置が) 変わらぬ  
ni-nu-pa-nu pusi-gama-jo: 子の 方の 小星 (北極星) よ  
kumurada tiri: uï 雲に 隠される ことなく 輝いて いる  
ni-nu-pa-nu pusi-gama-jo: 子の 方の 小星よ  
vva-ja mijagi-du あなたを 仰いで  
kanaja-ja mijagi-du カナシャ (恋人の名) を 仰いで  
sakai-ja ika-jo: 栄えて いくと するよ

(『城辺町史第六巻歌謡編』より)

婚礼歌の1つ。カナシャとは女性の愛称ですから、この歌は結婚の宴席で男性がうたったのでしょう。「航海の際、船乗りたちの頼りとなる北極星。さて、私も好きなカナシャを頼りに、人生を豊かに送るとしよう」—— 相思相愛の男女の仲であれば、何ともほほえましく、納得できる歌です。ところで、歌い出しの「夏冬」は、一年中ということ。一年をナツとフユの2季に分けていた頃の、これは名残と言えましょう。

一年をナツとフユの2季に分けていたことについては、数例ですが今日でも各村の年間祭祀のサイクルの中に、その痕跡を認めることができます。

上野地区の新里では、その数々の年間祭祀を1年のサイクルに合わせて、前期・後期に分けます。前期は、旧暦3月頃から同8月頃にかけて行われる祭祀、後期は、旧暦9月頃から翌年の同2月頃にかけて行われる祭祀、という分類です。おそらく夏関連の祭祀、冬関連の祭祀という観念が背後にあるのでしょう。

表 2：暦上の 4 季と 24 節気の方言名、等々。

季節	方言名	節気	名前	方言名	主な特徴・農耕との関係等
春	paru	正月節	立春	—	正月芋を植える。大豆、下大豆を蒔く。
		正月節	雨水	—	芋の苗を育てる。
		2月節	啓蟄	—	小豆、早取り小豆、緑豆を蒔く。
		2月節	春分	pīngan	彼岸。
		3月節	清明	ʃi:mi:	エンドウ豆の収穫。
		3月節	穀雨	—	
夏	natsī	4月節	立夏	—	夏芋の植え付け。大豆の収穫。
		4月節	小満	ʃu:man	
		5月節	芒種	bo:ʃu:	粟、早取り小豆、緑豆の収穫。
		5月節	夏至	ka:tsi:	南風吹く。甘蔗の畝立て。
		6月節	小暑	—	
		6月節	大暑	—	
秋	aki	7月節	立秋	—	甘蔗、冬芋の植始め。
		7月節	処暑	—	
		8月節	白露	—	北風が吹き始める。小豆の収穫。
		8月節	秋分	pīngan	エンドウ豆を蒔く。彼岸。
		9月節	寒露	kanru	サシバの渡来。
		9月節	霜降	—	
冬	fuju	10月節	立冬	—	粟の幡種。甘蔗の植え付け、終わる。 下大豆の収穫。
		10月節	小雪	—	
		11月節	大雪	—	
		11月節	冬至	tundzi:	急に寒さが増す。
		12月節	小寒	—	甘蔗の高倍土。
		12月節	大寒	—	一年でいちばんの寒さがる。

(謝敷正市著『ユナンダキズマ むかしの暮らし』を参考に作成)

平良地区の西辺でも、年間祭祀はやはり、前期・後期の2分類です(上原孝三)。同地区の狩俣でもかつてはそうでした。ここでは、夏関連の祭祀、冬関連の祭祀をつよく意識してい

ました。ただし、狩俣では長い間、新しい神女が選出できなくて、年間祭祀は行われていないということです。

〔コーヒー・タイム〕先の『おもろさうし』には、夏と冬の2語はあるが、春と秋という語はありません。オモロ時代の人々も、一年を夏と冬の2季に分けていたと考えられます。気象学者の石島英氏と正木譲氏によれば、「もともと沖縄には、春と秋という語はなかった」（石島英・正木譲著『天気ことわざ』）ということです。私も昨年、八重山で民俗調査の際、同席してインフォーマントを務めてくださった5名の高齢者の方々にそのことを訊ねたところ、どなたも一様に八重山でも同じだと話しておられました。沖縄には「うりずん」という季節語もありますが、これは夏の入りを意味します。

## 2. 暦上の24節気のうち、いくつかに方言名がある。

1年を区分して、暦上では24節気があります。この24節気のうち、方言で呼称される節気と、そうでない節気があります。なぜかと考えます。おそらく宮古の農業は伝統的に粟や麦などの穀物や甘藷が中心でありましたから、敢えて暦上の24節気を意識しないでも農業が出来たからだろうと推測します。もちろん、これはあくまで仮説です。宮古の農業と24節気との関係については、今後の調査・研究の必要性を指摘しておきたいと思います。（表2）

## おわりに

私は本日、2つのテーマで話をしました。1つは宮古の島々の方言呼称について、2つは季節を表す方言について。両テーマとも出来るだけ事例を上げて説明するように努めました。正直なところ準備の段階で、いろいろと資料の不足を痛感しました。その点、話の内容が皆さんの期待に充分応えられなかったことをお詫びします。

ただ、宮古方言を記録する事業は、今こうして始まったばかりです。今後、方言研究の専門家だけでなく、宮古に少しでも関心のある人たちを幅広く結集して、事業を展開していく必要があるでしょう。時間がかかり、根気を要する事業になりますが、ふるさとの方言を記録するという一点で、みんなが楽しみながら協同すればよいと思います。協同とは、みんなで心と力を寄せ合うことです。最後に、この事業のご成功をお祈りいたします。

付記：大神島方言については、同島在住の久貝愛子さんと、野原出身で言語研究者の野原優一先生に、いろいろと教えてもらいました。記して、お礼申し上げます。

